

〈シンポジウム概要報告〉

## カントと尊厳の復権

中澤 武

「人間の尊厳」とは何か。人間に尊厳が「ある」とは、どういうことなのか。今回のシンポジウムは、このような問いの答えを求めてカント哲学の立場に立ち戻り、道徳哲学および形而上学における尊厳の意味と価値を再検討する試みである。シンポジウムの構成は、中澤による問題提起を受けて、まず蔵田伸雄による提題「人間の尊厳という価値の实在」および宇佐美公生による提題「尊厳概念の形而上学的意味の再検討」があり、これらの提題に関して平出喜代恵が特定質問を行った。そのうえで再び中澤が追加コメントを述べ、現代ドイツの生命倫理学における「人間の尊厳」概念について、特にディーター・ビルンバッハーの所論を紹介した。ビルンバッハーは、「人間の尊厳」に「強い」概念と「弱い」概念を区別し、特有の適用領域と規範的内実を示すとともに他の価値との比較考量可能な範囲を区切る斬新な主張を展開している。以上を受けて、最後にフロアからは多くの質問が出た。例えば「人間の尊厳は道徳的世界を構築するために不可欠なのか」「人間性と尊厳および義務との関係をどのように理解するべきか」等の問題について活発な議論が交わされた。ふたつの提題の詳細については各提題者の論述にゆずるとして、以下では問題提起の概要をお伝えする。

「人間の尊厳」は、いまや数々の国際規約にも記されて、人権と分かちがたく結び合わされ、政治的・法的な理念として他に類を見ない地位を与えられている。「人間の尊厳」を「不可侵」とするドイツ基本法の第一条は、その典型である。わが国でも、近年「人間の尊厳」は法的・倫理的理念としての意義を認められつつある。哲学的観点から見れば、「人間の尊厳」は古代ローマから中世キリスト教神学、ルネサンス期、さらには啓蒙の時代を経て現代に至るヨーロッパ思想史を背景とする概念であり、その意義については多様な解釈が可能である。さらに、現代の生命科学がもたらす自然認識の変容は、人間の範疇的な独自性までも揺るがしつつある。また、現代社会における世俗的価値の多元化は「人間の尊厳」それ自体をも解体しかねない。現代は、尊厳の危機の時代である。その中に生きる我々は、果たして「人間の尊厳」にどのような意味と価値を見出しうるだろうか。いま一度カントとともに、「人間の尊厳」という理念の意義を問う次第である。